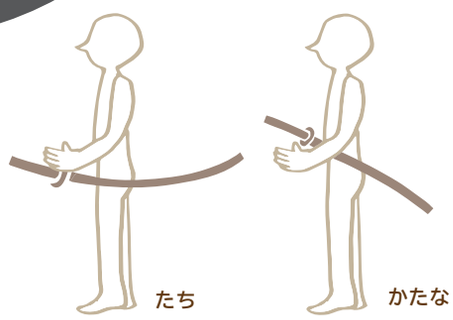
2024.2.7

博物館 Dictionary　No.234

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

「たち」と「かたな」

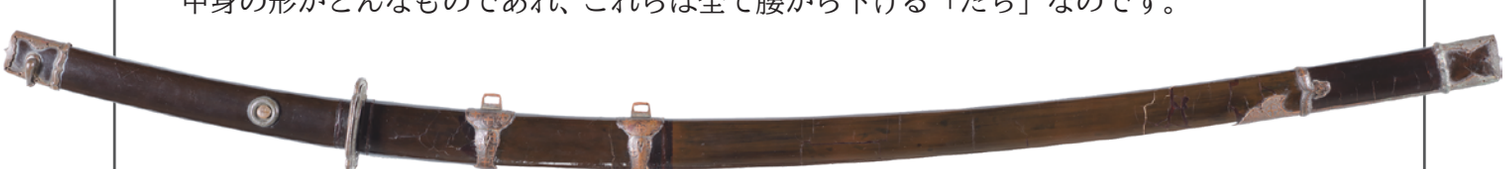


なぜ「上向き」と「下向き」？

博物館で日本刀を見ると、同じ形をしているのになぜか刃を上向きにして展示されているものと、刃を下向きにして展示されているものがあります。それぞれの作品には「太刀」や「刀」と書いてあったり、時には「大刀」「横刀」「打刀」「腰刀」「短刀」「脇差」と、さまざまな名前がついていたりと、よく分からないかもしれません。でも大丈夫。漢字で書くとなんだかいろいろありそうですが、実は日本刀には「たち」と「かたな」の二つしかないのです。「たち」は刃を下向きにして腰から吊り下げて身につけるもの、「かたな」は刃を上向きにして帯に直接差し込んで身につけるものをいいます。身につけた状態を再現して展示されるため、同じ形をしているものであっても、上向きだったり下向きだったりするのですね。

用途分類と型式分類

私たちは物を分類するとき、その物の使い道や使い方で分ける方法（用途分類）と、その物の形や文様といった外見の特徴で分ける方法（型式分類）のどちらかを使っています。「たち」はつながっている物を切り離す意味の動詞「断つ（ち）」が名詞になったもので、「何かを断ち切る」という用途がもとになった名前です。日本において特に戦闘に使われる「たち」は刀身を納める鞘に 1 カ所または 2 カ所の留具をつけて、そこに紐や鎖を通して腰からぶら下げていました。これは弥生時代から続く伝統で、「佩く」といいます。反りの無い直刀はもちろん、反りのある日本刀が生まれた 12 世紀になってからも同じ方法で身につけていました。漢字の表記としては中身の刀身が古代の直刀で長いものについては「大刀」、短めのものについては「横刀」、それらより少し後の時代の反りのあるものについては「太刀」を用いますが、中身の形がどんなものであれ、これらは全て腰から下げる「たち」なのです。



重要文化財　太刀 銘 波平行安（号 笹貫）の黒漆太刀 拵

室町時代 15 世紀　　京都国立博物館蔵

一方「かたな」という名前は外見の特徴を元にして、片方という意味の「カタ」と、刃の意味の「ハ（ナ）」を合わせて生まれた言葉です。刀身の片方にだけ刃がついている「かたな」は両刃の刃物と比べて安全で小回りがきくため、日常生活をおくる上でとても便利な道具でした。ですから元々は武器ではなく、例えば奈良時代の正倉院宝物には刀子といって、物を切る他に木簡や竹簡の字を削り取る消しゴムのような役割で使う小さな「かたな」があります。現代よりももっと不便な時代です。何かを切ることのできる道具は、なくてはならないものだったため、老いも若きも、どんな職業の人でも、常に「かたな」を身につけて生活のさまざまな場面で活用していました。「かたな」は日常生活に使いやすいように長さも短かったことや、「たち」のようにいちいち紐や鎖で繋げるのは不便だったこともあり、鞘ごと直接帯に差し込んで身につけていたのです。

最初は小さく、日常の道具だった「かたな」ですが、やがて武士が力を持つようになると、彼らが使う「かたな」の中には、武器として形を変えたものがあらわれました。武士たちの主な武器は弓矢で、その補助的な武器として「たち」が使われてきましたが、それに加え、「かたな」も戦いで使いやすいように大型化したのです。この時、便利な道具としての「かたな」とは別に、武器として打ち合いに使う「かたな」である「打刀」が登場しました。それ以降、これまでどおりの小型のものを「腰刀」と呼ぶようになり、二種類の「かたな」が存在することになりました。「打刀」は当時の「たち」に使われていた鎬造という刀身の形や鐔を取り入れて変化したため、「腰刀」とはずいぶん違ってみえます。しかし、形や大きさは違っても、帯に直接差し込んで身につける方法は変わらなかったため、すべて同じく「かたな」の仲間です。

重要文化財　牡丹造梅花皮鮫鞘腰刀 拵
南北朝時代　14世紀　京都国立博物館蔵

重要文化財　金熨斗刻鞘大小 拵のうち大刀（打刀）拵
桃山時代　17世紀　京都国立博物館蔵

（工芸室　末兼 俊彦 ）